

特別寄稿

広島の平和記念資料館を訪れて

（前日蓮宗現代宗教研究所所長）

石 川 浩 徳

原爆ドームは見て来た

昨年秋も深まった十一月中旬、久しぶりに広島を訪れた。広島は、見渡す限りビルが立ち並び、多くの人や車が行き交う繁華な大都会となっていた。

あの不気味な巨大きのこ雲に覆われた下で壊滅した広島が、よくぞこれまで復興したものである。今では平和記念公園そばの原爆ドームを見ないと、同じ広島とは思えないほどの大都会である。何度か訪れる機会があった。時には広島公園での宗門の主催する追悼慰霊法要や、研修会や講習会という公務で訪れたが、思うように時間がとれず、用を済ませばすぐ戻るという日程で、このたびのように市内電車やバスで町中をゆっくり見て回ることはなかった。原爆資料館さえも寄る時間がなかった。その願いがようやく適い、プライベートな旅の中で時間をかけて原爆資料館も見ることができた。

この広島が、一発の原子爆弾で一瞬のうちに壊滅したのは、もう半世紀以上も前のことだ。あの日、そう昭和二十年八月六日、突如としてきのこ雲に覆われた広島市の市街は、ものすごい爆風と熱線で瓦礫と死の地獄と化した。その惨状は言葉に言い表せられないほどのむごさであったことは、記録写真や証言で分かる。

今では世界遺産となった原爆ドームも損傷が激しく、補強の最中であつた。真っ青な空に突きだしているドーム型の冠は、疲労こんぱいの姿をようやく保っているかに見える。ドームはその場所からずうっと、戦後の荒れ果てた瓦礫の大地が徐々に復興し、やがてたくましい街へと蘇っていった広島を見守って来たのである。年をとった原爆ドームは今、太田川に沿って整備された平和公園を訪れた世界中からの平和を愛する人々に、無言のメッセージを託しつづけている。

「原爆ドーム」すなわち産業奨励館は、他の建物と共に原子爆弾が投下された至近距離にあつて、被爆した。すさまじい風と火によって破壊され無残な姿になり、それ以来「原爆ドーム」と呼ばれるようになった。そして、全身創痕の状態ながらも辛うじて建ちつづけ、原爆がいかに残忍で非人道的な武器であるかを訴え、戦争の罪惡について無言の叫びをあげてきた。大量殺戮を目的とした原子爆弾の直撃をうけて、真っ黒焦げになって死んでいった人々、瓦礫の下敷きになって死んでいった人々、大火傷を負い放射能を浴びて生き地獄を体

験している人々、その有り様を原爆ドームは歴史の証人のごとくみんな見て来た。今では平素静かな河畔に、年老いたその姿を見せている。

あれから半世紀余の歳月が過ぎて、毎年八月がくると、この広島平和公園には反核の旗やプラカードがならび、人々は公園にあふれんばかりに集まり、声を張り上げて核廃絶を世界に向かって訴え、平和を願い犠牲者を追悼する。原爆ドームはそれらのすべてをみんな見て来た。

平和資料館の展示物は語る

平和公園の「原爆の火」は絶えることなく静かに燃えつづけ、「平和の鐘」は白い建物の下にあって、ときおりあたりに音を響かせていた。資料館が無かったら原爆の惨禍が本当にあったのかさえ疑われそうなほど、今の広島は繁栄し賑やかな街になっている。戦争を体験した者のほうが少なくなってしまった今日では、戦争を語り継いで行くことさえ難しくなりつつあるだけに、この「広島平和資料館」は貴重な存在となっている。

資料館は修学旅行の生徒たちで一杯であった。一步資料館に足を踏み入れると一足飛びに六〇年近くもタイムスリップしてしまうほど、生々しい感覚で昭和二十年がよみがえってくる。一瞬のうちに焼け野原となった広島市街の惨状が、模型や写真で迫ってくる。原子爆弾

独特のきのこ雲の下に、破壊された町並みは死の世界となって広がっていた。記憶をたどって、絵や文に書き残したりリアルな体験記。六千度の高温を出す放射能の熱によってガラスや食器類が何枚もくっついてしまった物、衣服の切れ端や焼けただれた時計や鉄兜、瓦礫の残骸等、どれもこれも当時の状況のものすごさは、胸に迫ってきて言葉を飲むほどである。

ボロ切れのようになった少女、黒焦げになって転がっているいくつもの焼死体、高い放射能をあびて死んだように横たわっている人たち、市内全部を見渡せるほど荒涼とした街や川、資料館の展示物のどれもこれも、当時のものすごさを物語っていた。私自身の戦災体験にオーバーラップして涙を禁じ得ず、足が止まり凝視して動けなくなる。広島、長崎の被爆を、戦争だから仕方がないで終わらせてはなるまい。

小冊子写真集「知ってください、あの日のことを」の二ページ目に、幼い男の子が防空頭巾をかぶっておにぎりを手に、傷ついた顔でじっと見つめている姿がある。

《あの日

この子の目の前で

起きたことを

知っていたきたいのです

あなたに

そして

全世界の人びとに

》

この惨状をこの悲しみを、未来に伝えねばならない。かつての軍国主義日本の罪悪を検証しつつ、同時にアメリカの悪魔の所業を決して忘れてはなるまい。この資料館を訪れている修学旅行の生徒達が、メモ帳を持ちながら「原爆はイヤ、怖い」「戦争ってこんなふうになるんだ」「平和って本当に大事なのね」などと語り合っていた。この生徒たちに、核の恐ろしさと平和の大切さを語り継ぐ者になってももらいたいと、願わずにはいられない。NGOの活動と同時に、学校教育の場で「平和」を正課にすることが必要ではないか。それと安保や有事法や集団的自衛権がどんな結果をもたらすものかを、真剣に勉強することだ。そして、未来永劫「ノーモア広島・長崎」を世界の祈りとするためにも。

戦火はいつになったら止むのか

しかるに、今やアメリカを中心として世界は核戦争がいつ起こっても不思議ではない状況下に有る。イスラエルとパレスチナの仁義なき戦いは、多くの犠牲者を出してなお、どちらかが倒れない限り終止符を打ちそうにない悲しい状況である。貿易センターがテロによって破壊されてからというもの、報復という名の攻撃合戦が続き、人間の命を容赦なく奪い合っ

ている。国連の名を借りたアメリカの対イラク政策は、ひとつ間違えば核弾頭が飛び交う可能性さえある。それでなくとも、世界のあちこちで火花が散り、その戦火の中で、かならず人命が奪われ、家が焼かれ、飢えて路頭にたたずむ無辜（むこ）の老人や子供たちがいる。

一見平和に見える今の日本はどうか。政治の貧困と自己本位の衆愚によって出口の見当たらない経済不況をもたらし、ささやかな家庭生活をも苦しめている。二十一世紀は心の時代と喧伝していたのはついこの間のことであったが、極悪な犯罪は日増しに増え、自殺者は後を絶たない。宗教と名の付くものはあふれるほど存在していても、本当の救いはどこにあるのかが分からずにいる。民衆は迷いの渦に翻弄され、その場かぎりの日々を送っている。原発はウソと故障続きで問題がクローズアップし、公害は自然環境を汚染し破壊を進め、一方、抗体の効かない病原菌が増えていて、不治の病をもたらしている。

外交政策は相変わらずアメリカに追従して、戦争の火種ともなる有事立法を成立させようとし、わざわざ危険な状況を呼び込んでいるとしか思えない。何でもアメリカの言いなりで、軍隊でないといいつつ自衛隊を現地へ派遣し、集団的自衛権は憲法違反だからと言いながら、結果的には行使せざるを得ず、イージス艦をインド洋に派遣して危険な火遊びを始めてしまった。もう後戻りできないだろう。もはや「善神国を去り悪神たよりをなす」という宗祖の言葉どおり、為政者の心は悪神に占領されてしまった感さえする。軍事国家北朝鮮の

動きも、不気味な存在である。どっちを向いても、第2次世界大戦の前夜のごとき世界情勢である。

昭和二十年に、国中が総懺悔して、いかなることがあっても戦争を忌避し、永久平和を誓ったのではなかったか。半世紀前の悲惨な体験が少しも生かされていない。「ノーマン・アイランド・長崎」の悲痛な叫びは、世界どこか日本国内にも届いていないのだろうか。為政者の耳はふさがったままなのだろうか。三千万ともいわれた戦争犠牲者の命を代償に平和を手中にして、金輪際戦争はしない、戦争の道具も持たない、作らない、使わないと、誓ったはずではなかったか。

もういちど平和のために

戦争で命を奪われた人達に、我々は顔向けができない状況を作ってしまったてはいないか。近ごろは、戦争は悪であるが、平和を願うが故に戦わなければならない、という奇弁を弄して、戦争を肯定し中には賛美する為政者や好戦者たちが増えている。黙っていれば彼らは戦争への道を際限なくどんどん進めていくだろう。広島歴代の市長さんは、世界に向かって、核廃絶、武器全廃の願いを込めて平和メッセージを発信しつづけている。

わが宗門は戦後、総力を上げて立正平和運動に取り組み推進して来た。時代がいかに推

しようとして、この大切な運動を竜頭蛇尾に終わらせてはならない。「わが宗門の立正平和運動は決して一時的な、そしてまた、感傷的な叫びではない。人類の真の平和と幸福とを実現する唯一の力ぎは、世界の全人類が仏性に目覚めることである。これを喚起すべく叫びつづければならない」(昭和三十年七月、宗報三三卷頭言)という言葉を、重く受け止めていきたい。

原爆ドームは疲れている。平和を見届け続けて六十年近い。広島が美しい街に蘇った姿にひと安心して、もうそのお役を降りたいと思っていることだろう。「それなのに、どうも世界も日本も、怪しげな雲行きになって来た。困ったものだ。本当に困ったものだ。あれほど恐ろしい目に遭い、尊い血を流して泣き苦しみ反省したことを、もう忘れてしまったのか」と、老いた体を補強されながら原爆ドームは「まだ私の役は終わりそうにないのか」と長嘆息しているのではないか。

原爆資料館を見終わって外に出ると、広島空が急に暗くなった。ポツポツと雨が落ちて来て、平和公園の石畳を濡らした。原爆ドームが悲しんで泣いているように、私には思えてならなかった。